

保育者養成教育における映像提出を併用したピアノ実技指導

Piano Teaching for Childhood-Care Worker Education Combined the Submission Video

中平 勝子, 赤羽 美希*, 小林 田鶴子+, 山口 尚己**, 深見 友紀子**

Katsuko T. NAKAHIRA, Miki AKAHANE, Tazuko KOBAYASHI, Naoki YAMAGUCHI, Yukiko FUKAMI

長岡技術科学大学, *深見友紀子ミュージックラボ, +名古屋女子大学,

**フジノン株式会社, **京都女子大学

NAGAOKA UNIVERSITY OF TECHNOLOGY, *FUKAMI YUKIKO MUSIC LABO,

+NAGOYA WOMEN'S UNIVERSITY, **FUJINON CORPORATION,

**KYOTO WOMEN'S UNIVERSITY

<あらまし> 保育者養成教育におけるピアノ実技教育は、少ない対面教育時間の中で学生の実技能力を向上させなければならないという難しさが指摘されてきた。従来、解決策として対面教育の機会を増やすことでしか実技能力向上は改善されないと思われてきた。本実践では学生自身による映像取得を併用することで、対面教育の機会を増やすことなく学生の実技能力の向上を促進することができた。映像取得には、情報管理が容易にできるF社製品「KS20」を用い、デジタルデバイスによる抵抗を減らした。その結果、特に映像取得回数が4～5回程度の学生は実技能力向上が顕著に見られた。

<キーワード> 授業実践, 教育機器利用, 大学教育, 訓練支援システム, 自己学習力

1. はじめに

ピアノ実技指導は、様々な意味において対面指導での技能伝達が重要な鍵となる。また、その技能向上には自主的な訓練が不可欠である。ピアノ実技指導に対する教育プログラムは、1980年代から改善提案がなされ、特に1990年代には保育者養成機関を中心としたミュージックラボラトリー（ML）における集団レッスンによって改善しようという実践が盛んに行われてきた。

MLは、数十台のキーボードに学生を向かわせ、教員は各学生の演奏音源を聞きながら個別に指導することが可能な、いわゆる集合実技指導の先駆的教育体系として位置づけされる。その活用方法は、単なる実技指導に限らずキーボード和声を含む楽典授業にも導入されている。個人レッスンでは教育効率が上がらない科目に対して1人または2人ずつ鍵盤に向かわせることで、鍵盤を通じてより効率的に楽典を理解させる効果があると考えられてきた。

しかし、MLの設備は、使い方そのものが煩雑で、教員側に多大なる負荷がかかる上、授業時間内でしか学生の演技演奏を確認することができないため、現実問題として百名近い学生を抱える授業への導入は不可能に近い。そのため、最終的には「実技指導は対面で」という動きから脱却できずにいた。

本実践は、多くの学生を抱える保育系教育機関において、映像提出を併用したピアノ実技指導の改善を目的とする実践を行った。

2. 実践環境

本実践は、K女子大学発達教育学部児童学科「児童音楽」（2年次生必須科目）に対して平成18年6月～7月の2ヶ月間にわたって行われた。授業時間は1回あたり2コマ（180分）で、声楽およびピアノ実技を同時に指導する。履修学生数は105名で、声楽とコードネームの座学が2クラスで、ピアノ実技は各クラスをグループに分けて実施している。

- 声楽
- ピアノ実技指導（グループレッスン）
- コードネームの座学（後半のみ）
- 試験（中間実技試験、期末筆記・実技試験）

K女子大学では、他大学の保育系と比べ、ピアノ実技科目が非常に少ないという特徴があり、児童音楽Iは在学生在が唯一履修することのできるピアノ実技科目である。他にも他学科との共通科目である「ピアノ入門」という科目が1年次生後期に設置されているが、入門科目であるために主にピアノレッスン歴が少ない学生に対して補習的に実施されている科目である。

児童音楽Iは、専任の講師1名、声楽指導非常勤講師1名、ピアノ指導非常勤講師4名の計6名で担当している。教材は、保育者採用試験でよく出題される定番曲を多く収録している「子どものうた200」「続 子どものうた200」（いづれも小林美実著、チャイルド本社刊）の中の曲、仏教系の保育園・幼稚園で日常的に歌っている曲、および声楽の授業で配布した弾き歌い曲の中から任意曲を選択させた。これらは、いづれも採用試験対策、および教育実習への対応を考慮したものである。

図1に、従来のピアノ指導方式と本実践におけるピアノ指導方式の差異を提示する。従来は、グループレッスンを各授業あたり45分間、授業期間中に行い、中間実技試験と期末実技試験を実施することで学生の実技評価を行っていた。すなわち、学生が自主的に練習を行うモチベーションは実技試験しかなかった。それに対し、本実践では、中間実技試験(5月下旬)の後グループレッスンの他に期末実技試験へ向けたリハーサルとして学生による演奏を録画させ、教員へ提出することを推奨した。また、この行為を成績点に加算することを学生に伝達した。これらの行為を経て最終的に期末実技試験(7月中旬)を行った。

映像取得・提出の方法は中間実技試験終了後に解説・実施した。F社より販売されているコンテンツ作成ツール「KS20(研修君)」の操作説明を全履修者に対して行い、このことで、相当数の学生が自主的に練習を行うことを促進できると考えた。KS20は

- ・ 映像録画を通常のビデオデッキと同じ操作方法で行うことができる
- ・ 必要に応じて、映像内に書き込みができる
- ・ 映像録画はmpeg2形式で記録され、DVDに焼き付けることが可能である
- ・ 各映像のファイル名をバーコードで管理することができる

などの特徴を有し、コンピュータ操作を知らない学生であっても容易に自分の映像を記録・抽出できるメリットがある。本実践では、学生が映像を記録した後書き出されるバーコードシールを教員に提出することで映像提出とみなすことにした。

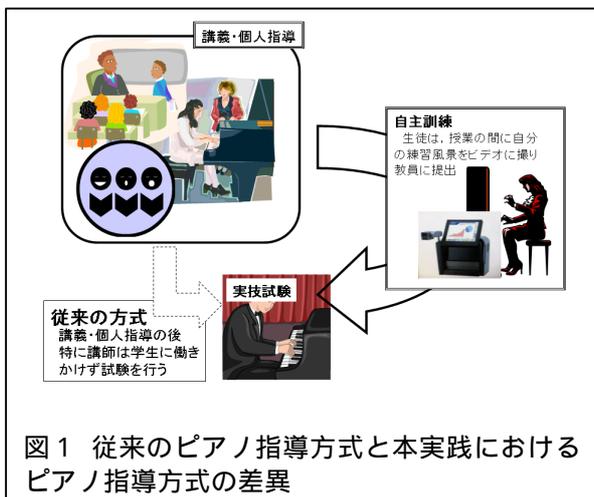


図1 従来のピアノ指導方式と本実践におけるピアノ指導方式の差異

KS20を利用した録画は、6月中旬に初めて行われ、以後7月上旬頃から本格化し、期末実技試験日前の数日間が最も多く行われた。演奏録画提出状況による実技能力向上の効果を測定するため、期末実技試験では次の観点から採点した。

- 歌、ピアノ演奏の完成度
- 演奏姿勢、顔の表情。
- 弾き歌いとしての完成度

3. 実践結果

表1に、本実践の結果を示す。

映像提出は、KS20を使って自身の演奏を提出した回数、録画人数は該当映像提出を行った人数である。標準偏差は、各映像提出区分に該当する学生の期末試験に対する偏差を取っている。また、中間実技試験と期末実技試験では採点員が異なるため、本実践ではほぼ全員が受験した期末実技試験についてのみ結果を示した。

映像提出は、全く録画をしない学生から10回程録画した学生まで、かなり分散していた。しかし、6回以上録画している学生は数も少なく、期末試験の点数も良くなかったことから、単位を取得するための策として映像提出を増やしたと判断し、表には掲載していない。

表1:「児童音楽I」での実践結果

映像提出(回)	録画人数(人)	期末平均点(点)	標準偏差
0	14	71.9	7.02
1	13	74.0	5.52
2	25	74.0	5.34
3	23	71.4	16.06
4	14	74.6	3.77
5	8	77.0	4.38

映像提出と期末試験の平均点に着目すると、全く録画を行わなかった学生の平均点に対し、1度でも録画を行った学生の方が総じて高い得点を示している。特に5回も録画を行った学生の平均点は総じて高かった。また、映像提出と期末試験の平均点における相関係数は0.66であったことから、かかる変数の間には明らかな正相関が存在することが分かる。

次に、標準偏差に着目すると、映像提出を3回行った学生の間において異常に値が高いことが分かる。これは、期末試験の点数の悪さを予想して成績点を稼ぐために録画した学生と純粋にがんばって練習した学生が混在することに原因があるのではないかと推測している。

4. おわりに

本実践では、映像提出を併用した保育者養成機関におけるピアノ実技教育を行い、映像提出が学生に及ぼす正の影響を考察した。その結果、映像提出回数の多い学生ほど実技能力の向上が見られた。特に映像提出は4~5回ほど行わせるのがよく、3回程程度の提出の場合には提出することによる成績点を目的とした学生も存在する。

謝辞 本研究は、平成18年度科学研究費補助金基盤(C)研究課題(課題番号18500742)「教員・保育者養成のためのピアノ実技e-ラーニングコースの設計と開発」の補助を受けて行われたものである。